

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目一八の二コーポ幅ヶ谷九〇四 電話(03)337714649

FAX(03)329915367

振替 東京0158431 労金 東京労金本店No1154163

購読料 月額500円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

「民間政治臨調」のねらう政治の補完

小選挙区制への具体的行動開始

初めての経験、異様な集會

——民間政治臨調「国民集會」の断面——

資料1 政治改革推進協議会の目的と組織体制(民間政治臨調)

(1) 協議会の活動方針

(2) 協議会の委員体制について

(3) 民間政治臨調の活動に参加する国会議員

(4) 中選挙区制度廃止宣言署名人名

資料2 協議会の組織体制と委員会編成について

資料3 中選挙区制廃止宣言(民間政治臨調)

資料4 政治改革を求める集會アピール(民間政治臨調)

一切の責任は執行部にあり

——新潟県知事選の総括と教訓——

団員、家族の生活支援の必要性を痛感

——北海道国労闘争団を旅して 池上文夫——

なんのための臨時大会

——社会党東京都本部大会の報告——

読者からのおたより

13

17

14

10

9

9

8

7

7

6

6

6

4

2

旬刊 社会通信

NO. 524

一九九二年二月一日

一九九二年二月一日発行
(毎月一日・二日・三日発行)

「民間政治臨調」のねらう政治の補完

小選挙区制への具体的行動開始

「中選挙区制度廃止宣言」の暴挙

「中選挙区制度廃止宣言」を与野党衆参国會議員百八十八人が署名して決めた（署名した議員は自民百七人、社会三十三人、公明二十八人、民社三人、社民連三人、連合参議院八人、日本新党四人、無所属二人）。この宣言は十一月十日に開かれた「政治改革を求める国民集会」に迎合して行ったもので、単純小選挙区制を実現しようとする自民党政治改革本部の方向とも一致する。この国民集会は、財界（亀井正夫、鈴木永二）とその御用学者（内田健三、東海大教授、岡沢憲英、早大教授、堀江湛慶、応大法学部部長等）、そして労組一部幹部（山岸連合会長、鷲尾悦也、鉄鋼労連委員長、得本輝人、自動車総連会長等）で結成された政治改革推進協議会（民間政治臨調）が主催したものである。

この時期に、「民間政治臨調」が動くということは何か。明らかに「佐川事件」で窮地に立つ自民党、宮沢内閣を支えようとするものであり、佐川疑惑事件糾明から逃れようという財界の意図があまりにもミエミエである。何故「宣言」がいうように「混乱と停滞を続ける現実の政治」なのか。それはいうまでもなく財界・大企業が巨額の政治献金を自民党と各派閥のボスに投入してきたからではないか。政・財・官の三角癒着が今日の汚職・腐敗政治の根本であることは、いまや中学生でも知っている。そこにメスを入れないで、しかも自民党の金丸、竹下と同時に反省しなければならぬ「財界」に迎合して、見当はずれの「選挙制度改革」に血道を上げるのか、勤労国民には理解できないことである。

「中選挙区制度廃止宣言」に署名した百八十八人の議員は全員「中選挙区制」にかわる単純小選挙区制度に賛成しているのかというところではないという。新たな選挙制度はこれから議論するというのだから無責任である。国会では、三人区から五人区の中選挙区の間かでまず定数は正を行うという与野党一致の決議が厳として存在しているのである。自ら決めた国会決議を無視して、結果的には単純小選挙区制に引きつり込まれる可能性の強い「民間政治臨調」謀略に身を寄せてゆく社会党議員（自公民はとにかくとしても）の無節操にはあきれられない。この社会党議員の大部分は例の新江田派シリウス（尻馬ならぬ尻牛シラウに乗るといふ人もいる）のメンバーである。そして自民党議員のなかには竹下派・小沢グループが多い。こうみてくると、かつて金丸・田辺・山岸で意図していた保守二党論^{II}保革大連合路線が見え隠れしてくるのである。

財界がねらう自民党の補完策

いわゆる民間政治臨調主催の「政治改革を求める国民集会」十一月十日のアピールには大要次のように書かれている。

(一) 政権交代可能な新しい政治の実現にむけ、政党改革、国会改革、選挙制度改革、政治資金制度改革、地方分権の推進など、今日の政治行政システム全般の抜本改革に挑

戦する。

(二) われわれは(政治改革推進協議会)すべてのしがらみを捨て、日本政治の改革に立ち上がった勇氣ある国会議員を支援し、ともに連帯していく。

(三) 総理をはじめ各党党首は、政治改革推進の陣頭に立つ決意と行動力を示し、政治改革実現のスケジュールを国民の前に明らかにせよ。

前記の財界御用学者達が書いたものだけに、一見もつともらしいが、よく読むと「改革」という言葉が多く踊っているだけである。ただこのアピールのなかではつきりと明記している危険な要素は、民間政治臨調の方針に賛同する国会議員は支援するが、支持しない議員は応援しないぞという「脅し」をかけていることである。いわゆる選別支持はかねてからの山岸・全電通のお家芸であるが、次の選挙では、連合傘下大労組のかなりのところがこれをやろうとしている。鉄鋼、全通などは大幅にやろうとしている。財界と連合が一体となって左派を切り捨てて補完体制をつくり上げようとしているのである。金丸・田辺ラインは消えたが、その実質的内容は蘇生しつつあるといえる。アピールにある「改革に立ち上がった勇氣ある国会議員」とは中選挙区制度廃止に署名した百八十八人の国会議員というわけだ。

ところがである。この百八十八人の国会議員は勤労国民の側から見ると、「政治とカネをめぐる汚職・腐敗・不正の根絶をめざす」(アピール文より)政治改革を推進できる人はきわめて少ない。自民党は若手できれいな議員が多いというが、二世議員が数多く、しかもいずれも派閥から金をもらっている子分達である。ハマ公氏の子分・鈴木宗男、小沢一郎氏の子分・船田元など立派なものである。社会党からは一年生で弁護士出身者やかつての暴力革命集団「全共闘」全共闘「ずれ」といわれる議員が多い。議員を辞任すべきとまで批判されている武藤山治氏や堀昌雄氏も入っているからオカシイ。日本新党は四人全員(参院)だが、日本新党の政治資金にはサガワマネーがかなり入っているという疑惑を解明するのが先であろう。

民間政治臨調(会長・亀井正夫)とこれに協力する国会議員達の最大の誤りは、国民が強く求めている「佐川汚職・腐敗事件」の徹底追及に熱心でないことである。もし熱心であるというなら全野党が要求し、世論も求めている金丸や竹下をはじめとする全証人の喚問の実現になぜ力を入れないのか。政治改革は、今日の政・財・官のユチャクが生みだしている汚職腐敗の根本をえぐり出し、そこから改革案が生まれるのが正しい方法である。病根を確認しないで、手術したり薬を与えたとすれば病気は、治るどころかさらに悪くなる。

民間政治臨調は、日本の支配層の危機を乗り切るために、そして財界の政治支配・自民党政府を補完するために行動を起こしたというのが真相である。それにしても山岸会長など連合のダラ幹(もつともだからダラ幹なのだが)が大手をふってそのお手伝いをしていく姿は腹が立つより悲しくなる。

(社会通信政権研究班)

初めての経験、異様な集会

——民間政治臨調「国民集会」の断面——

政治改革推進協議会（民間政治臨調）が、「政治改革を求める国民集会」と銘打って、十一月十日に日比谷野音で集会を開いた。

竹下内閣発足からむ皇民党事件、佐川疑惑問題と竹下派の分裂など、政局混迷するなか興味をもって参加した。

まず異様に感じたのは会場入口で、参加者一人ひとりに資料が袋で渡されたことである。日比谷野音は種々の集会が行われるところだが、私も労働団体、市民の集会など数多く参加した一人であるが初めての経験であった。その袋の数は、三千から三千五百くらいは用意されていたに相違なからう。

また、野音での集会は、いろんな団体がそれぞれの機関紙やビラを配布し、自らの主張をするのだが、それも一切なかった。集会後に、松下政経塾が機関紙を配っていたのが唯一であった。

次は会場内である。舞台せましと、超党派の国会議員約八十名ほどがずらりと並んでいた。その中央前列に、竹下派で時の人、羽田孜の顔もあった。舞台下は、関係者、記者席がロープで一般参加者と仕切られてもいた。座席の最後列の手すりには、「政治改革推進協議会」の旗が多数立てられていた。労働組合の旗は、見なれているのは全通、全電通位で他はあまりなじみがないものが七、八本位が目についた位である。

次は議事進行についてである。

大学教授の内田健三（会長代理）氏の挨拶の後、亀井正夫政治改革推進協議会会長の基調挨拶が始まる。

亀井会長は、「政治、政党は不信をもたれている。参加された皆さんはバブル経済破綻で苦しんでいるのに政党的確に対応していない。政権交替がなく政治資金が膨らむことがスキャンダルの根本だ」と参加者への同情と政治へ叱責が飛ばされた。

次に登場したのは、鈴木永二行革委員長でもあり、民間政治臨調では特別委員長である。鈴木行革委員長は、今日までの労資関係をつくり上げて来た自信からか「労資一体となつて政治改革に向けた集会は過去の歴史にはなかった」とエールを送った。

次には、一方のパートナーである山岸連合長（特別委員）の挨拶である。

山岸連合会長は、野党、連合を代表して一言と前置きして、「大変苦労される中、政治改革に努力されている羽田孜さんはじめの方々に敬意を表したい」と述べた。これは針先の皮肉位にはなるが、今は「ほめ殺し」という言葉が一般になじんでいる時、労働団体のナショナルセンター会長としてそれをやってもらいたかったのだが……。また山岸は「政治改革に対して、妨害する人間、公約を破るような人は落選させなくてはならない」と決意を披露した。全電通の委員長時代の延長としての選別支持などを思い浮かべて言っているのだから良いがと考えさせられた。

次には、民間政治臨調「緊急提言」（第一から第三委員会）が鷲尾鉄鋼労連委員長、堀江慶応大学法学部長、小島正興セコム副会長からそれぞれなされ、超党派の国会議員から

の決意表明と続いた。

石破（自民党）氏は、「政治スキャンダルは倫理の問題。しかし制度の問題でもある。行財政改革では国民に負担をお願いして来た。しかし、政治は負担していない。今こそ政治改革の断行を」と述べた。

堀込（社会党）氏は、「提言を受けとめていく。佐川問題究明しなければならぬ。しかし今まで与党を問いつめれば良しとして来たところにも腐敗の原因があり反省しなければならぬ」と「謙虚」さをもった決意が述べられた。

平田（公明党）、柳田（民社党）とこれに続いて「国民のための政治を」といった政治改革への決意が行われた。

集会は、挨拶、提言、決意を各位が行い、話しが終ってもバラバラといった拍手であり、もちろんヤジもなく、静かに終了した。舞台の上のみが熱っぽく感じられた集会であった。司会者が途中で、会場からの意見紹介を行った。その中で「支持できる政党がない。新党ができるしか投票できない」「政党再編を」と言ったことを市民の声として紹介していた。この流れが政治改革推進協議会（民間政治臨調）の大枠の目指すところではないのかという印象をもった。

私は社会党支持者の一人だが、佐川疑惑を徹底究明が先決であるのに、「政治改革」だと超党派で、原発問題でも一緒に考えろというのはどうしたわけだろう。

「改革」というならまずそういうことを社会党できちんとやってほしいと、思わずにはおれなかった。

（私鉄労働者）

（九ページよりつづく）

われわれは、政治と行政の根本改革に挑戦する。

われわれは、政治とは何か、国会議員は本来何をすべきか、国民はいかにあるべきかを徹底的に問い直す。

本日の「政治改革を求める国民集会」の開催にあたり、

一、われわれは、政治とカネをめぐる汚職・腐敗・不正の根絶をめざすとともに、内外変化に対応しうる責任ある政治の確立、政権交代可能な新しい政治の実現にむけ、政党改革、国会改革、選挙制度改革、政治資金制度改革、地方分権の推進など、今日の政治行政システム全般の抜本改革に挑戦する。

一、主権者たる国民の自覚と行動なしに、政治改革は実現できない。われわれは日本政治の危機に際し、それぞれの立場から政治の改革に立ち向かう覚悟を示すとともに、すべてのしがらみを捨て、日本政治の改革に立ち上がった勇氣ある国会議員を支援し、ともに連帯していく決意と姿勢を内外に明らかにする。

一、総理をはじめ各党党首は、政治改革推進の陣頭に立つ決意と行動力を示し、政治改革実現のスケジュールを国民の前に明らかにすべきである。われわれは、小手先の改革でお茶を濁すような政治の側の対応を断じて許さない。政党は、今回が国民の与えた最後の機会であることを強く認識すべきである。

われわれは、以上のアピールを採択し、政治改革の推進にむけて国民世論の総結集をめざす第一歩とすることを、ここに宣言する。

資料1 民間政治臨調(九二年四月二〇日)

政治改革推進協議会の目的と組織体制について

協議会の活動方針

- 1、協議会は政府、政党の政治改革に対する取り組みを監視し、改革の推進を強く求める。また改革推進の戦略を構築し世論の喚起につとめるなど、国民側の運動推進組織としての役割を果たす。
- 2、協議会は、日本政治の現状に危機感を抱き、政治改革の推進に賛同する与野党の若手、改革派議員と連帯し、改革推進勢力の超党派の結集をめざす。また、あらゆる機会を通じて、各党、各界の垣根を低くすることにつとめる。
- 3、協議会は、政治改革の全体像と、各党、各界が合意しうる具体的な改革案をとりまとめ、本年秋をめどに公表する。また制度改革と並行し、既成政党の根本的な見直しをおこない、新しい時代の政党のあり方、政権交代、政党再編のあり方について提言する。このため協議会は、下部機関として四つの委員会を設置する。また政党再編、中選挙区制度の改革等をテーマとした超党派議員による四つの研究会を発足させ、緊密な交流のなかで改革の全体像をまとめる。

協議会の委員体制について

1、協議会三役(四名)

会長 長 亀 井 正 夫 住友電気工業取締役相談役・日経連特別顧問
 会長代理 得 本 輝 人 自動車総連会長
 会長代理 内 田 健 三 東海大学教授
 主 査 佐々木 毅 東京大学教授

2、協議会特別委員(顧問会議メンバー三名)

特別委員 平 岩 外 四 経済団体連合会会長
 特別委員 永 野 健 日本経済者団体連盟会長
 特別委員 石 川 六 郎 日本商工会議所会頭
 特別委員 速 水 優 経済同友会代表幹事
 特別委員 宇 野 収 関西経済連合会会長
 特別委員 山 岸 章 日本労働組合総連合会会長
 特別委員 鈴 木 永 二 臨時行政改革推進審議会会長
 特別委員 大 来 佐武郎 内外政策研究会会長
 特別委員 木 村 睦 男 元参議院議長
 特別委員 堅 山 利 文 全国労働者福祉・共済協会理事長
 特別委員 宇 佐 美 忠 信 国際労働財団理事長
 特別委員 平 田 富 太郎 日本生産性本部会長
 特別委員 稲 葉 秀 三 社会経済国民会議議長

4、協議会四委員長

第一委員会委員長 鷲 尾 悦 也 鉄鋼労連委員長

- 第二委員会委員長 堀江 湛 慶応義塾大学法学部長
- 第三委員会委員長 赤澤 璋一 国際経済交流財団会長
- 第四委員会委員長 川島 廣守 セントラル野球連盟会長
- 5、各社論説委員長・連絡会議メンバー(協議会のアドバイザー)

- 田中 豊 朝日新聞論説主幹
- 清水 幹夫 毎日新聞論説委員長
- 島 脩 読売新聞論説委員長
- 清原 武彦 産経新聞論説委員長
- 日野 一陽 日本経済新聞論説副主幹
- 松崎 稔 共同通信編集局次長
- 沖野 剛 時事通信解説委員長
- 吉村 信亮 東京新聞論説主幹
- 河崎 善一郎 日本放送協会解説委員

※なお、労組からの委員にはゼンセン、造船重機、電機、電力、自治労、商業労連、自動車、全電通八名の委員長・副会長が加わっている。

民間政治臨調の活動に参加する国会議員(四月二〇日)

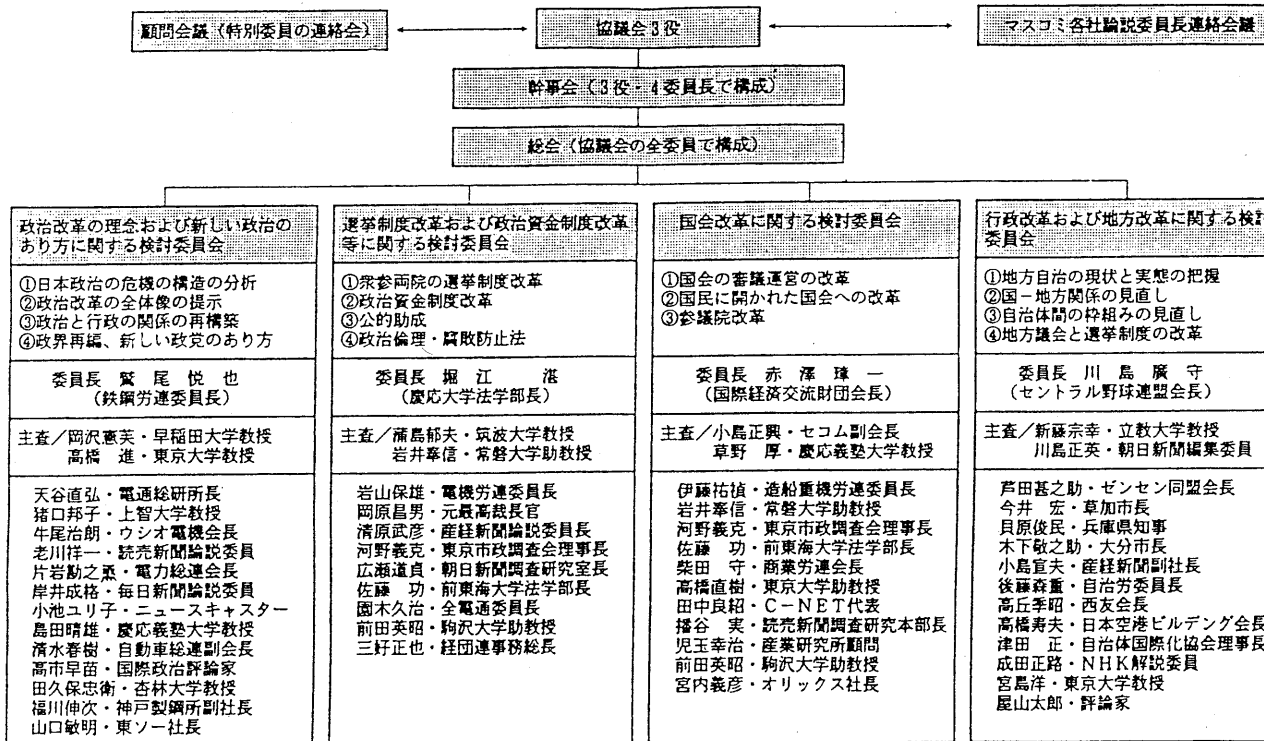
- 自由民主党(四三人)
- 日本社会党(二六人)

- (幹) 仙谷由人(衆)、大島章宏(衆)、細川律夫(衆)、(幹) 筒井信隆(衆)、岡崎トミ子(衆)、細谷治通(衆)、(幹) 堀込征雄(衆)、小川信(衆)、北村哲男(参)、(幹) 松原修雄(衆)、小林守(衆)、小林正(参)、(幹) 吉岡賢治(衆)、五島正規(衆)、千葉景子(参)、(幹) 種田誠(参)、渋谷修(衆)、堀利和(参)、秋葉忠利(衆)、鈴木喜久子(衆)、前畑幸子(参)、池田元久(衆)、土肥隆一(衆)、山田健一(参)、宇都宮真由美(衆)、長谷百合子(衆)
- 公明党(九人) / 民社党(六人) / 社民連(三人) / 連合参議院員(八人)

中選挙区制度廃止宣言署名人名(九二年十一月十日)

- 自由民主党、一〇六人
- 日本社会党、三三人
- 衆議院議員 池田元久、石橋大吉、伊藤忠治、伊東秀子、上田利正、宇都宮真由美、大島章宏、小川信、五島正規、渋谷修、仙谷由人、筒井信隆、土肥隆一、中村正男、長谷百合子、細谷治通、堀昌雄、堀込征雄、松原修雄、武藤山治、吉岡賢治
- 参議院議員 今井澄、大淵絹子、川橋幸子、北村哲男、栗原君子、小林正、種田誠、千葉景子、堀利和、前畑幸子、山田健一、藁科満治
- 公明党、二七人 / 民社党、三人 / 社会民主連合、三人 / 連合参議院、八人 / 日本新党、四人 / 無所属、二人

協議会の組織体制と委員会編成について



(委員会の運営)

1. 各委員会は5月から2回〜3回程度開催し、各テーマについて本年秋季までに答申をまとめる。
2. 各委員会には、委員長の任命により主査をおく。主査は委員長の補佐をおこなうとともに、超党派議員の研究会のコーディネーターをかねる。
3. 各委員会には、委員以外にも連合事務局、労働界、各経済団体などのオブ参加をつる。

資料2 協議会の組織体制と委員会編成について

資料3 中選挙区廃止宣言〔民間政治臨調〕、九二年十一月十日

わが国の政治は重大な岐路にたたさされている。政治とカネをめぐる相次ぐ不祥事の発覚により、国民の政治に対する不信は頂点に達し、わが国議会制民主政治は崩壊の危機に頻している。

しかも世界はいま、歴史的な激動の時代を迎え、わが国は内外の課題に的確に対応しうる新しい政治の構築を強く求められている。しかし、混沌と停滞を続ける現実の政治は、山積みする課題への対応力を失い、一刻の猶予も許されない深刻な事態を招いている。

われわれのめざす改革は、政治と行政の根本的な見直しである。われわれは、内外の変化に対応しうる責任ある政治の実現、政権交代が可能な健全な政党政治の実現にむけ、選挙制度と政治資金制度の改革、政党と国会の改革、地方分権の推進など、今日の政治行政システムの根本改革に取り組み覚悟を有している。

しかし、いまや制度疲労の極限に達し、その歴史的使命を終えようとしている中選挙区制度を維持する限り、この根本改革を実現することはきわめて困難であると断じざるをえない。選挙制度の改革は、われわれのめざす政治と行政のすべての改革の成否にかかわる核心課題であり、われわれ自身、いかに血を流そうとも乗り越えねばならないハードルである。

内外環境の急速な変化のなか、わが国に残された時間は限られている。

われわれは、ここに、歴史的な使命を終えた中選挙区制度との決別を決意し、国民の負託に応えるうる新しい政治と制度の創造に立ち向かうことを宣言する。

もとより改革の道は平坦でない。しかしながらわれわれには、政治にたずさわる者としての使命感と歴史に対する責任がある。

われわれは政党の違いを超え、日本の政治を変える大きなうねりをつくるべき時期に来ていることを固く信ずる。国民から日本の将来を負託された国会議員の一人として、この困難な改革に立ち向かおうとするすべての同志に対し、党派を超えた連帯を呼びかける。

われわれは、この宣言に名を連ねる同志との自由な議論と連帯を通じて、日本の政治史に新たな足跡を残す決意を、ここに示すものである。

資料4 政治改革を求める集会アピール

〔民間政治臨調〕、九二年十一月十日

われわれは、世代を超え、立場を超え、党派を超え、改革に立ち向かおうとするすべての同志に呼びかける。

どれほどの困難がともなおうとも、どれほどの血を流そうとも、改革をやり遂げようとする勇気ある者たちを支援し、ともに連帯すべき時期にきている。問われているのは、われわれ国民の決意と行動である。改革を選択するか、それとも現状に安住するか、国民自身の闘う精神が、いま強く求められている。

(五ページにつづく)

一切の責任は執行部にあり

——新潟県知事選の総括と教訓——

全国注目の新潟知事選挙が、一〇月二五日に行われた。候補選考に至る経過は、『社会通信』五二〇号に報告されているので、その後の経緯を報告する。

一言でいえば、佐川疑獄の棚上げにつながる四党相乗りへの県民の政治不信とシラケ、社会党に対する批判、共産党推薦候補としては「異例」の善戦といえる。

自民、社会、公明、民社の四党と「新しい新潟県をつくる県民の会」推薦の平山征夫（前日銀仙台支店長）が、共産党と「清潔に革新県政をつくるみんなの会」推薦の長崎明（元新大学長）を抑え、当選した。

相乗りに対する政治不信が棄権へ

知事選挙としては五〇・六六%と史上最低の投票率になった。かろうじて過半数超えたのも、県議補選が行われた上越市と平山の出身地の柏崎市の投票率に支えられてといえる。県都新潟市は、三九・〇九%で四割を切り、二〇市中で最低投票率の三条市は、三七・九五%である。三人に二人が投票に行かなかったことになる。

前回の知事選挙（八九年）は、消費税とリクルート、政治スキャンダルが焦点になり、七九・〇七%の高投票率であった。その時は、自民党推薦の金子清前知事、社会党推薦の志苦裕、共産党推薦の長崎明の三者で戦われた。社共の革新票が得票率で五三・三三%と自民党をはじめて上回った。その時に比べ約二〇%も投票率が低下している。また、過去最低の投票率だった七八年知事選挙の六〇・二五%からも一〇%近く低下している。

史上最低の投票率は何を示しているだろうか。

佐川疑獄（前知事選挙の三億円問題等々）の徹底的究明が知事選挙の焦点になるべきであった。独自候補を擁立して佐川疑獄事件を選挙の焦点にすべき社会党が、こともあろうに、この時期に自民党と相乗りになった。そして、県政史上はじめて自社公民四党の相乗り候補の誕生となった。

「水と油の自民党と社会党が、なぜ一緒なのか」（佐渡金井町・男性）、初めて棄権をしたという新発田市の主婦は「相乗りをしてごまかされた気持ち」と不信感をぶちまけている（『朝日新聞』）。多くの県民が不信とシラケを棄権という形で示した。とりわけ社会党に対する批判は大きい。

「共にスネに傷をもつ者同士、表裏の中傷合戦を避けるには選挙をしないのが一番」との某大学教授の指摘もある。

『新潟日報』（一〇月二八日）は、前回の志苦票六一万票の行方を平山三八%、長崎三〇%、棄権三二%と分析している。社会党支持者の三分の一は相手候補に、三分の一は相乗りに対する批判から「今回は入れる候補がいなから寝ている」と棄権票となった。

また、無効票が二万七〇七九票（一・八八%）で、前回知事選挙に比べて二・六倍になっている。しかも、棄権に比べてより積極的な抗議の意志表示である白票が、一万三八六三票と無効票の増加した分の八割を占めている。『新潟日報』は、「選びたくない 選べない」

と適切な見出しを付けている。

共産党系候補としては「異常」な善戦

支持政党の構造としては、はじめて自社公民四党対共産党の戦いとなった。得票は、平山五六万二一九票に対して長崎三五万四一六票である。得票率は、平山六一・二七％に対して長崎三八・七三％である。

長崎の「異常」な善戦である。共産党推薦の候補としては、過去最高の得票数である。前回の知事選挙の一四万一六一票に比して二・五倍である。得票率にいたっては、約四倍である。

その多くが社会党支持票から流れたものである。前述したように『新潟日報』は、前回の志苦票の三〇％が長崎に回り、長崎票の五四％が、志苦票と分析している。

県内の政党得票率を過去四回の参議院比例区で比べると、自民党約四二％、社会党約二九％、公明党約八％、民社党約五％である。四党合計で八三・六％である。一方、共産党は五・六％である。政党の得票率からいえば、勝負にならない闘いであった。また、全国的な相乗り対共産党という構図からも異常の得票である。

「批判の選択肢が、共産党系の長崎氏ひとりに限られ、投票を見送ったり、無効票を投じたりしたひとも少なくなかった。こうした隠れた批判票も考えれば、二人の候補の得票差だけで、民意を量るのは誤りだ」と『朝日新聞』解説者は述べている。

社会党、社会党支持勢力の混乱と亀裂

社会党は、選挙ごとに合同選対を作ってきた。構成は、社会党、県評（センター）、日農、婦人会議、社青同、フォーラム（全国協）の六団体である。ところが日農、婦人会議、社青同の三団体が、平山不支持を決定した。また、県評センター理事会も平山積極的支持は、全国単産のわずかでしかなかったという。

松井弁護士（長崎選対の責任者、今井弁護士（前回の志苦選対事務局長）の離党は五二〇号で報告済みである。

その後、新津市議員斉藤一保氏の離党、長崎陣営へ。前々回の知事選挙の社会党推薦候補の今井敬弥弁護士も公然と長崎個人演説会の応援弁士として出席し、選挙運動していると報道。また、地方の選対責任者に現職社会党町議がなる等々、混乱と亀裂が広がった。

「自分の票が減ると悪いから戸別訪問をしない」（某県議）の声に代表されるように、地方議員のほとんどが支持者への戸別訪問をしなかった。いかに平山「支持」が、無理な選択であったか明瞭である。

投票日翌日の『朝日新聞』は、「四年前に社会党系の労働組合に入った。労働者と経営者が一体になり、四党が相乗りしての選挙には、やはり無理がある」（投票した男性）、「この時期になぜ社会党が単独候補を出さないのか不思議だし、ふがいない」（棄権・主婦）、「社会党は何を考えているんだか。原点を忘れてる」（棄権・男性）と有権者の声を載せている。社会党に批判が集中している。

そして、社会党支持率の激減である（新潟県）。一〇月二一日の『読売新聞』は、「社会党支持は一一・一％で七月参議院選挙の二二・七％からほぼ半減」と世論調査を報じてい

る。また、『新潟日報』は、一〇月二二日で支持率一三・八%と報じ、七月調査の二三・〇%に比べて九%も低下させている。結果として、相乗りの政治姿勢に県民の批判が集中し、支持率をほぼ半減させた。

一切の責任は執行部にあり―徹底的な総括と組織内民主主義の確立へ

社会党は、初めて県政与党の座を手に入れた。しかし、県会は自民党の圧倒的勢力、せいぜい一部の幹部が知事室にノックなしで入れるくらいのものである。

それを手に入れるために、払った代償は余りにも大きかった。県民の社会党に対する不信と党離れ、党内外の混乱と亀裂である。

「執行部は、社会党を支えているのは、金権政治に真剣に怒っている人たちだということを見誤った」(近藤県議)、「社会党の基礎票の三分の一は長崎氏に流れた」(米山県議・日農県連委員長)、「知事選挙は、佐川急便事件に対する県民の審判をくだすことだった。独自候補を擁立できなかった執行部の首を切るのは当然だ」(池田三条市議・党建協事務局長)と『朝日新聞』(一〇月二七日)は報じている。また、武田亀田町議は「社会党支持者の二〇万票は、長崎氏に流れた。これだけの支持者を失った責任は執行部にある」(『新潟日報』一〇月二八日)と批判を強めている。

そして、一〇月三二日の県本部執行委員会は、「独自候補を見送った情勢認識は違うのでは」、「相乗りという党の判断、選挙が党組織全体や党外に浸透していたか、厳しく総括を」、「県委員会を開くべきだった」と批判がでている(『朝日新聞』)。

執行部は、今選挙戦で二重の過ちを犯した。第一に、この時期に独自候補擁立を見送り、保守系候補を擁立したことである。しかも四党相乗りによる佐川疑惑事件の実質的棚上げをはかったことである。

第二に、候補決定にあたり、機関会議の開催要求を無視し、開催しなかった(今までは県委員会なりで決定)。そして、「執行委員会で決定した」と中央に上申した。社会党の規約のどこを見ても、県本部執行委員会に議決権は与えられていない。こんなことがまかり通れば、行政府が国会に関係なく法律を作れることになる。

また、田辺執行部も広島でみせたような「指導力」を發揮せず、追認した。

新潟の社会党は、全国的に見れば「左派」的である。保守相乗りなどよその話であったし、原発、『新宣言』、「組織改革」の党全国大会では修正案の中心を担ってきた。

しかし、歴代の執行部がリーダーシップを發揮したのではない。県委員会等で下部の突き上げ、意見によって、県本部の方向・意向が決定されてきた。

例えば、全国大会代議員は、県本部大会で代議員が選挙で選んできた。そのことによつて、個々の代議員の権利が優先できた。

また、前々回の知事選挙で志苦執行部(当時)は、保守系の元十日町市長の擁立をはかった。しかし、県委員会で提案を否決し、独自候補擁立を決定し、独自候補で戦うこととなった。

こうした党内民主主義の一定の確立が、「左派」的新潟県本部の伝統を築いてきた。

ところが関山(衆議員・創る会)執行部は、現実対応の社会党を創るために、党内民主主義の萎縮に手を入れた。

執行部の選出基準を、郡単位から選挙区単位(二名一部例外も)にし、半減させた。そ

の結果、ほとんどバッチ族となり、「一徹者」が減少した。また、選挙で選んでいた全国大会代議員を、代議員全員の約半分を執行部が取り（しかも委員長の名指し）、残りを選挙で選ぶに改悪した。

そして、今知事選挙を、前々回の志苦執行部の「過ち」を繰り返さないように考えた。それは、「党外の民間組織による候補選考」と「県委員会を開催しない」と「党内で白黒つけさせない」ということだった。

こうした傾向は労働組合でも同じだった。ほとんどの組合が、決議機関を開催しないで推薦を「決定」している。連合への気兼ねや孤立をしたくないということであろうが、連合加盟にあたって「従来の路線を守る」とした約束はどこに行ったのか。連合が前面に出てきたことにもよるが、各単組の方針、路線が揺らいでいることに問題がある。四党相乗りという、今までにない選択は、より民主的な討論、決定が必要であった。組合員大衆の声をきく機関運営にすべきだろう。まさに、「路線を守る」ことは、闘いである。

新潟党建協は、中旬に総括会議を開催する予定でいる。今後一二月の県委員会にむけて、徹底的な総括と組織内民主主義を確立するために、より広範な仲間の結集をめざしていくことになる。また、当然、執行部の指導責任に議論がいくことになる。

ちなみに私は、無効の党「決定」に拘束されず、保守か革新か、どちらの政策が賛同できるかで判断し、長崎氏で運動した。

(新潟・K)

◇ 読者からのおたより ◇

交流会で元気に 来鹿（鹿兒島）の際はたいへんお世話になりました。闘争団員も集会、交流会が盛会に終って元気が出てきたようです。団結まつりに参加できなくて残念でしたが、またお会いできる機会を楽しみにしています。寒さも一日ごとに増してきましたが、身体に気をつけてがんばって下さい。私たちも鹿兒島の地で一日も早い解決を求めてがんばりぬきたいと思っています。

(鹿兒島・国労T)

出版記念会に感謝 「紙ひとえの選択―国労鹿兒島一万分の一の記録」の出版記念パーティーまで開いていただいて一同感謝いたしております。私どもの国鉄闘争へのかかわり、まだまだ不十分です。ご支援にこたえる意味でもがんばってまいります。(鹿兒島・全通K) 編集部より 出版記念会が盛会で心から喜んでいきます。みんなの気持ちを汲んで国労鹿兒島地本の闘争団ももっともつとがんばって下さい。Kさん、彼らはがんばります。さらに強いご支援を私たちからもお願いします。

職場の仲間と一体になる運動をめざす 貴誌のいつもながら率直な提起、たいへんありがたく読ませていただいております。全国的な情勢、各労組の方向や問題点、とりわけ職場生産点でがんばるわれわれと中央の違いをえぐり出してくれる提起に力強く励まされています。

(自治労・M)

異様な国会 国会は異様です。は虫類のように無表情で、無内容な答弁をくり返す宮沢総理の背後にはのっぴきならぬ自民党事情があることは、バカでも分かりました。「これは解散だな」のつぶやきが本会議場に衝撃波のようにひろがりました。

(議員・X)

団員、家族の生活支援の必要性を痛感

——北海道国労闘争団を旅して——

十月二〇日から三日間、編集子をふくめ七人の仲間が岩井章氏を団長に北海道の国労闘争団を訪ねた。岩井氏の闘争団激励はこれで都合五度。北海道、九州のすべての闘争団を回ったことになる。編集子もこれに同行した。その記録を福山市（広島県）現業労働組合執行委員長の池上文夫氏に報告していただいた。
(編集部)

国鉄（ＪＲ）当局の不当な首切り合理化から六年目を迎えた国労闘争団は、資本・当局の思惑をはね返しながらか、全国各地で力強くたたかっている。全国の三六組織、九六六名の仲間とその家族は、首切り撤回という、労働者としてのあたり前の要求を持って、国鉄労働組合は勿論、家族ぐるみで、まさに働く者の権利確立に向かって進んでいる。決して平坦な道のではないが、そこに労働者の正義があり、家族と地域に真の幸福が招来するからたたかっているのである。

みなぎる熱気あふれる闘争意欲

十月二〇日から二三日の四日間、日本の最北端でがんばっている留萌、稚内、音威子府、名寄の各闘争団への激励交流に参加する機会を得た私は、労働運動に身を置く一人として、資本・当局に対し絶対に譲れない課題である国労闘争を、その闘争団の実際からまなび、そこから得た体験と闘争力、そして働く者の信念を今後の運動のエネルギーに転嫁したく全労協を代表して激励交流に参加した。

十月下旬といえれば私の住んでいる広島はまだ秋であるが、日本の最北端はもう冬である。各地をまわりながら私は、「北緯五十度」という歌謡曲を思いうかべながら、この地での自然とのたたかいてもまた厳しいものがあるだろうと感じた。どこの闘争団事務所も、大型石油ストーブが焚かれ、闘争団の熱気ともミックスされた相乗効果によって、熱いもののみなぎっていた。

留萌闘争団は、ＪＲ留萌駅前の一等地に事務所を構えて、当局にニラミをきかしながら、一五名（平均三七歳）の団員が自活体制でがんばっている。自活体制はオルグ班、事務局、アルバイト班に任務分担され、その一方で元職場への抗議行動、管内・地区労・単産オルグと家族集会、家族オグルも積極的に取り組まれている。

闘争団・家族との交流会で、ある女性は「子どもを札幌の大学へ進学させているので、朝の四時から夜の八時まで、パートを三つかけもちをやって、何とか仕送りができている」と、厳しい生活状態を訴えていた。

稚内闘争団（七三名）は、福岡県の筑豊に次ぐ団員を擁しており、市内の中心地に約四〇〇坪の敷地に事務所、倉庫、会議室、宿泊施設などが完備された立派な事務所を構え、六人の事務局体制でがんばっている。交流会で闘争団のメンバーは、「ここまで闘ってこれたのは、まわりの仲間がいたからだ」、「子どもの病気も早く治してやりたいが、仲間のことと天秤にはかけられない。子どもにはリハビリの機械を買ってがんばっている」。「激

励にこられると勇気づけられる」と、率直な気持ちで私たちの激励に応えてくれた。

音威子府闘争団は、町のメインストリートに事務所を構え、あの有名な「手作りようかん」工場も併設しており、また木工工場を近くに借りて、村おこしの一環としての製品開発と運動にも大きく寄与した国労闘争に発展させている。

家族との交流会で、ある女性は「子どもをスキー教室に通わせている。経済的には大変だけど、闘争団の特別貸付金で通わせているが、子どもには、闘争団の皆が稼いでくれていることを言い聞かせている」またある女性は「夫は本州へオルグに出て、家にいることが少ないので、皆で支え合い、悩みもその時その時、皆で解決している。夫の身体は大丈夫だろうか」という話の中に、闘争団と家族の強い絆のようなものを感じた。この主体的な団結力が、村をあげての支援体制に連結しているのだろう。

名寄闘争団（三〇名）は、一軒の民家を借りて闘争の拠点を構えている。名寄では私たちが入る日程に合わせて、支援共闘会議が主催して、私たち一行の団長であった岩井章さんの講演会も計画され、主催者側の予想をはるかに超えて三〇〇名の参加者が集い、闘争団支援の熱気を感じさせる講演会を成功させた。

交流会には、社会党や地区労、婦人会議の幹部も出席し、それぞれの立場で闘争団支援の決意を述べられていた。家族の一人は、「小学校二年の子どもが社会科で、うちのお父さんの仕事を発表するとき悩んだこともある」、また「五・二八解決案に怒りを感じる」と家族の辛い実情と自らの心情を訴えていた。

長期闘争への構えは進展

今回、私が高まった闘争団は、それぞれに地域の実状に即して、自活体制と事務局体制、そして家族対策も含めて長期闘争への構えは徐々に進展しているように思えた。しかし、その一方で日常の生活は、家族からの訴えで紹介したように、子どもの養育と教育、父母の生活、家族の健康、年金などの将来への不安、そして何よりも闘争の展望、こうした不安を持ち続けながら、厳しい生活を送っている。

今、組織的な闘争団支援は、全国的には「デール基金」と物販、一千万署名で強力な支援体制づくりを目指しているが、団員と家族のたちまちの生活支援という点では、なお一層の努力が必要ではないだろうか。

問われる労働運動の再建

労働者の街頭行動がきわめて少なくなっているなかで、労働者同志の連帯意識も薄らいでいっている。労働者一人ひとりにますます企業内組合意識が強まり、その中でも組合幹部による労務管理によって、競争意識がはびこり、企業組合にあっても連帯感と帰属意識が急速に弱まっている。このことが、不当労働行為による一〇四七名の首切りという、労働者にとっては権利侵害の最たる大合理化攻撃であるにも拘らず、労働者の盛り上がり、いまだ不十分であり、その意識が今日の状況を反映しているのではないのか。

労働者を正しい方向か、或は誤った方向に導くのかは、とりもなおさず幹部の指導性の問題である。旧総評系の幹部であれば、ストライキや首切り撤回闘争、職場闘争等々、大なり小なり闘争指導の経験をもっており、あえて私が論じる必要はないが、少なくとも七

○年代前半までの労働運動は、特に最近目だっている幹部だけの連帯（接待）ではなく、職場と組織を越えて、様々な課題で労働者間の直接的な交流と共同行動が存在していた。今はどうなのか。幹部だけは朝早くから夜遅くまで、時の経つのを忘れて賑やかに、交流は盛んである。資本のやり口とまではいわないが、それを真似て、闘争しない組織ゆえに、資金繰りは極めて良好なのか、やたら会議と接待が目につく昨今である。そこには勿論、組合員大衆の姿はなく、幹部だけの運動が働く者の「労働者意識」の欠如を助長する原因になっている。

職場生産点における要求づくりと、ますます激しくなる合理化攻撃への抵抗闘争、そして地域にあっては争議組合への支援・連帯の行動、反戦・平和・民主主義・憲法擁護、環境などの国民的課題をもつての共同行動、こうした大衆行動が組織されることによって、日本の平和と民主主義が守られるのであり、とりわけ労働者の権利もまた守られ確立するものである。

この点の弱さが、「連合」主流の労働運動に顕著に現れている。その反映が、国労闘争ではないだろうか。しかし、その「連合」を構成しているのは、旧総評系の幹部でもある。このまま彼らが問題意識をもって行動に出なければ、二一世紀を待たずして日本の労働運動は、社会的影響力を失い、資本の補完勢力と化すことになりはしないか、と危惧しているのは私一人ではなからう。

原稿執筆中に熱いもの

国労闘争へ激励と交流の旅は、いま私たちが失いかけている「労働者の連帯」のすばらしさ、そして、苦しくて厳しいが、まさに家族ぐるみで社会の矛盾を糾すことに全力をあげている姿に、多くのことを学ぶことができた。私たちのメンバーの一人は、「激励に来る度に、皆が明るくなっていると感じる」、と言っていた。この言葉に、国労闘争の勝利への確信が込められていると思った。

これまで原稿執筆中に目頭が熱く感じた経験はあまりない私が、本稿でその事を体験した。闘争団の苦悩と怒りの、何分の一かを共有できたのだろうか。

私たちはこの闘いに連帯しながら闘争団への、物心両面の支援をさらに強めることと、国労闘争が働く者の権利確立と日本の労働運動のあり方に、基本的なテーマを投げかけたものであり、国労闘争を自らの運動として、粘り強くたたかっていききたい。

（池上文夫 福山市現業労働組合執行委員長）

国鉄闘争の原点を問う記録!! 好評発売中

紙ひとえの選択

国労鹿児島「一万分の一の記録」

桐原 浩著 社会通信社編

◆ B六判二〇〇頁／頒価千円／郵送料一部二四〇円、十部以上郵送料当社負担／多部数割引有

なんのための臨時大会？

——社会党東京都本部大会の報告——

社会党東京都本部第五十九回臨時大会が、十一月四日東交会馆で開催された。主要議題は、参議院選挙総括と渋沢委員長辞任に伴う後任委員長の選出であった。

〈経過〉

★開始時間十七時三〇分になってもいっこうに開催の気配なし、議事運営委員会が開かれていたとのこと。

★二〇分経過、司会が登場。成立しているのかいないのかわからないまま委員長あいさつ。

★続いて議事運営委員長発言、議長の選出が提案された。議長の選出について発言を求めた議員がいても無視。

★議場騒然のなか、前回大会議長がそのまま登壇。代議員の承認もそのまま議事進行。

★議事運営委員長から大会日程二十時五〇分に終了の提案。世田谷総支部代議員から発言を求める挙手があっても、議長無視。

★たまりかねた代議員が議長席につめよる。

★議長一方的に、一号議案（参議院選挙総括）提起、規律委員会報告（小峰氏他九名に出された処分について、高度な政治判断により十月二日全員を「厳重注意」にすることを規律委員会で決定した）書記長報告の指示、その後発言者指名。指名された発言者新宿総支部代議員は議長の議事進行が混乱をつくっている。このままでは発言出来ない！一時中断、世田谷代議員発言。

★世田谷総支部代議員からは、大会日程を二日間に延長するようにとの動議が提出されていたが、これを議事にとり上げず議事運営委員会に廻すとの扱ひ。

★一号議案発言通告二十四名あり、各総支部・団体一名十二名の発言、三分の発言制限。

★一号議案発言者、江戸川・港・清瀬・杜青同・大田・中野・多摩・世田谷・葛飾・千代田・豊島・新宿が発言。全ての代議員が都本部提案に対して、反対の発言。

【発言主旨】

- 都本部総括案は、言いわけでしかない。
- 総括案では、党員・支持者・都民が納得しない。
- 森田の民社会派入りはないと言いきった委員長はじめ執行部の責は重大。
- 委員長の辞任だけではすまない。執行部の総辞職を！
- 反PKO闘争後の選挙であり、連合型について再検討すべきであった。
- 都知事選をはじめ失態つづき、党として独自候補をたてるべきだ。
- 佐川問題で中央本部（田辺、伊藤、渋沢）の三名の名前がだされている、どう対応しているのか。
- 佐川にパーティー券五百万円分の購入をもらった六区吉田議員の公認取り消しと辞職勧告をするべきだ。このままでは都議選・衆議院選が聞えない。

●都議団のこの間の対応に疑問。鈴木都知事への与党化、拡声器規制条例の容認など党员・支持者からの批判がひろがっている。

★委員長、書記長から答弁。

★議事運営委員長から参議院選総括案に対して、修正案が出されているが参考資料として配布し、原案の承認をとの発言。

★議場が騒然。「修正案が出されているなら採決をとるように」との代議員の声。これを無視しようとする議長に対して、詰めよる代議員多数で中断。

★議長、一号議案の承認もしないまま二号議案（衆議院選・都議選方針）の発言者の指名。発言者三名。

★三号議案（都本部役員一部選出）で、国分寺総支部代議員発言。都本部委員長公選制の動議（都本部八名の衆議院議員他二名の提案）案。

★書記長「規約との関係があり、組織検討委員会に提起する」との答弁。

★新委員長に、あがたそうじ都議会議員を選出。

★時間がないとの理由で特別決議読み上げられず。二十二時三〇分終了。

総主流派体制の崩壊！

臨時大会の課題は、惨敗とも言える参議院選挙を徹底的に総括し、当面する佐川疑惑の徹底究明、自衛隊の海外派兵反対の闘いを強め、衆議院・都議選挙に勝利する社会党東京都本部の態勢づくりにあった。しかし、執行部は一日それも三時間の形式的大会でお茶を濁し、対外の批判を考え委員長を変えろしか考えていなかった。今までであったら、こうした状況に対して我々自身も色々あっても、もめるのはまずいのではとおわっていた。しかし、党の現状や執行部の対応を見たとき、多くの心ある代議員は発言や会場の熱気に現れたように、党の再生に向け行動しはじめた。

方針案の一部修正や執行部の少々の譲歩を求めても、今日の党の危機的状況を克服できないことは、参議院選の候補者選考過程からの党内民主主義の欠落で明確である。

党内民主主義、護憲の党の再生のため、あえて「反主流」に徹することも必要。

都本部の再生に向けて

今、臨時大会では多くの総支部、党员が現状の運動に対する危機感や不安を持っていることが明確になった。こうした良心的な党员と共に護憲の党の再生に向け、闘いを強めなければならない。

参議院選挙に連合内労働組合から「新党論」が叫ばれている。これは、護憲の党社会党の解体を意味する以外何物でもない。

当面する、佐川疑惑の徹底究明、自衛隊の海外派兵反対の闘いを強めることが、社会党の強化に結びつくことを確信している。

（社会党大田総支部 栗原洋美）